

鉄の

八幡・釜石はいま

● わたしが労働下宿の玄関をくぐったのは、十年前の十一月のある夕方のことだった。

● 「仕事ありますか」と声をか

けると、若い男の顔が覗き、ジャンパー姿で荷物のないわたしを見定めると、「通いかい？」と気のなきさうな声をたした。

● 住込み志願者とわかると、とたんに愛想がよくなつて、六畳ほ

どの部屋へ招き入れた……。

● それから、わたしは労働下宿の住人として……。

鎌田慧

町の

記録

ダイヤモンド社

失の

町の

記録

はいま

上巻の玄問を

昭和十一年の

を

「おき、ジャンパー表で荷物のないわたしを見定
目、気のなさうな声をした。」

「かると、とたんは顔がよくなくて、六畳は
どの部屋へ招き入れた。」

●—それから、わたしは男

地下道の住人として……。

慧

ちやまて社

著者略歴

鎌田 慧

1938年、青森県弘前市に生まれる。
1964年、早稲田大学文学部卒業。
新聞記者、雑誌編集者を経て、現在フリーライター。

主要著書——

『隠された公害』(三一書房)
『自動車絶望工場』(現代史出版会)
『逃げる民・出稼ぎ労働者』(日本評論社)
『血痕・冤罪の軌跡』(文藝春秋社)
『日本の兵器工場』(潮出版社)
『労働現場』(岩波新書)
『失業』(筑摩書房)
『倒産』(三一書房)
『ガリバーの足跡』(朝日新聞社)
『日本の原発地帯』(潮出版社)
『ピラ的精神』(晶文社)
『狙われた教科書』(光文社)
『去るも地獄 残るも地獄』(筑摩書房)

鉄の町の記録——八幡・釜石はいま——

昭和57年10月21日 初版発行

定価 1200円

著者 鎌田 慧

©1982 Satoshi Kamata

発行所 ダイヤモンド社

郵便番号 100
東京都千代田区霞が関 1-4-2
編集電話 東京 (504) 6403
販売電話 東京 (504) 6517
振替口座 東京 9-25976

落丁・乱丁本はお取替えいたします

公和印刷・川島製本
1036-181600-4405

「鉄の町の記録」／目次

1 章 絶望の部屋——労働下宿の記録

労働下宿の夜 2

高炉掃除人 13

本工Ⅱカミサマ 下請Ⅱニンゲン 20

労働下宿脱出のあとで 29

暴力支配の系譜 34

“門前雇用”の労働下宿 42

納屋制度と労働下宿 47

ある証言 52

2 章 鉄の流れ——釜石から八幡へ

栄光の製鉄所——釜石 58

3章

せめぎ合う波——鉄鋼労働者の闘い

離合集散の歴史 61

八幡村のゴールドラッシュ 64

ゴールドラッシュの末路 69

ある漁師の記憶 72

奪われた漁場 76

吉田磯吉の実力 80

ナグサメとワイヤカケ 85

人夫供給業の歴史 92

鋳造炉の火は消えたり 95

釜石での決起 102

「赤トンボ」の歌 108

八幡製鉄所の労働構造 115

三島光産事件 122

4章

黒い紐帯——八幡と筑豊

遠賀川の流れ 130

焼け焦げた時計 132

マイクロバスの道のり 139

燃え尽きたピット 146

筑豊の『最大産業』 150

坑夫たちのいま 152

人間スクラップ 158

夢のシームレス 162

ある閉山 169

5章

消えた高炉——鉄の町はいま…

「高炉公園」に立つ 184

洞海湾の深い眠り 189

Yさんからの手紙 193

君津へ——労働者の大移動

企業城下町の崩壊

206

199

あとがき

一章 絶望の部屋——労働下宿の記録

労働下宿の夜

国道三号線を隔てた新日鉄八幡製鉄所の塀の向うに、転炉工場の廃棄ガスが鮮やかな炎となって燃えさかっていた。それに眼を奪われながら路地を入ると、高田下宿（組）である。「作業員募集」の大きな看板が掲げられ、「祝新日鉄」「祝起業祭」の短冊が、へばりつくようにしてたれさがっていた。

前日の日が、八幡製鉄所創業七〇周年を祝う「起業祭」だった。区内の小、中学校は一斉休校、町をあげてのお祭りだったのである。わたしは、近在近郷からやってきたと思われる老人たちに押されるようにして「一日開放」の構内に入り、東田高炉の出銑を眺めていた。誇らしげに、かたわらの父親になにやら指さしながら説明している若い男のそばに立っていたとき、やがてこの高炉工場で働かされるようになるとは、夢にも思わなかった。昨日の、華やいだお祭り騒ぎとはちがって、春の町二丁目の、労働下宿街は、冬の夕暮のせいもあってか、なにか暗く澱んでいた。

わたしが高田下宿の玄関をくぐったのは、七〇（昭和四十五）年十一月のある夕方のことだった。

1章 絶望の部屋——労働下宿の記録

玄関の左側が、小窓で仕切った「帳場」である。

「仕事ありますか」

声をかけると、若い男の顔が覗き、ジャンパー姿で荷物もないわたしを見定めると、
「通いかい？」

と気のなさそうな声を出した。住込み志願者とわかれると、とたんに愛想がよくなって、六畳ほどの部屋へ招き入れた。わたしはちいさなテーブルの前に坐らされた。部屋の隅のテレビがクローズアップで、つけまつげの長い人気歌手の顔を写していた。わたしがポケットのマッチを捜していると「チョーバ」と呼ばれるその眼の細い男が、折込み広告をちぎって、石油ストープから器用に火を移してくれた。左手の小指は第一関節からつまられ、肉が少し盛りあがっていた。

「なに見て来たねえ」

そばに坐っていた瘦せた老婦人がたずねた。チョーバは、あわてて「社長だよ」と紹介した。

「八幡の駅前で、ポスターを見て」

わたしが答えたのを聞いて、彼女は満足そうに大きくうなずいた。八幡、黒崎、戸畑、若松などの街角の電柱や板塀には、さまざまな労働下宿の「作業員募集」のポスターが、競いあうように貼られていた。破れたり、はがされたりしたうえに、新しいのが貼られているのだった。

「現場 日鉄八幡港運、スラッグウール工業所

賃金 昼二四〇〇円以上、夜三〇〇〇円以上

資格 満十八歳より満五十歳迄身体健康人

なお誰にでも出来る簡単な仕事です」

この高田組のポスターと駒井組のがもつとも精力的に貼りめぐらされていた。わたしは、渡された大学ノートに、いわれたとおり、名前、生年月日、本籍地、連絡先を記入した。

「連絡先はちゃんと書いてくれよ。なんかあったときのためだからな」

チョーバは歯切れがよかった。東京にいたことがあるのだろうか。労働下宿では名前、年齢などはどうでもいい。吉田茂、鶴田浩二、北九州で人気のある旅役者の名前などが使われていたこともあったという。ただ困るのは、これら有名人と同姓同名の男たちが労働災害で死んだ場合、遺体が宙に浮いてしまうことである。

「メシ食いな」

チョーバは炊事場のほうをあごでしゃくった。玄関から続いているコンクリートの床のまん中に、一〇人くらい坐れる木のテーブルが置かれ、丸い竹の箸立てが見えた。炊事係は、長いひきずるような咳をしている陰気な男だった。縁の欠けたどんぶり。ごろごろ固まったメシ。同じどんぶりの味噌汁。それだけだった。醤油と塩で味をつけているため、味噌汁の香りや味にほど遠いものだった。ただ妙に塩辛いだけ。そのうすい汁に、キャベツが二、三切れと、サイの目切りにした豆腐が二、三個。わたしがここにいたのは、一週間だけだったが、そのあいだ、朝は味噌汁、夜はさばの煮付け、毎日これだけのおかずだった。

1章 絶望の部屋——労働下宿の記録

「荷物、預かってやろうか」

というのをうまくかわして、帳場の向いの部屋にあがった。盗難よけに荷物を保管してくれるというのだが、いったん預けてしまえば、簡単に出入れなくなってしまう。労働下宿は、荷物や洋服を強制的に預かり、本人が逃げだしたあと、下宿の住人相手に競売にする、ということわたしは聞かされていたのである。

部屋は六畳間だった。隙間もなく蒲団が敷かれ、その枕もとにひろげられたスポーツ新聞のうえに灰皿代りの空缶や、食べ散らかしたミカンの皮が転がり、足の踏み場もなかった。敷き蒲団は青いたて縞のうすっぱらなのが一枚、それと同じもう一枚を掛け蒲団にする。枕は冬にもかかわらずゴザ枕で、はじが破れて藁がはみ出したのが、三つほど転がっていた。ここに六人寝て、もうひとりが押入れに寝るのである。

窓ぎわのクギに汚れたタオルがぶら下がり、そのガラスの向うに鉄の手摺りが伸びている。壁にはピンナップ一枚はられていなかった。それはそこに住むだれもが「自分の部屋」という意識をもっていないことを示しているようだった。I組には一〇〇人ほどの労働者が收容されているのだが、昼夜二交替で働くので、五〇人が雑魚寝できれば十分なのである。シャツも、毛布も、枕さえない。蒲団のあいだにもぐるだけなのだが、蒲団は汗くさく重くて息苦しい。一組の蒲団に、ふたりずつ寝かされるので、寝返りを打つのさえ不自由で、夜中に何度も眼がさめた。

朝六時。玄関の壁に取りつけられたベルが必要以上にひびきわたる。それでもぞもぞやってい
るだけですぐ起きるものはだれもない。チョーバがガラス戸をあけて声をかける。

「起きてやれ」（起きろ）

コンクリートの床に散らばっている靴のなかから自分のを探しだしてつつかける。まだまっ暗な
玄関には、大型バスがエンジンをふかして待機している。あたりを震動させている音が出発をせき
たてているようである。調理場のカウンターの前に並べられたボール紙の名札から自分のを選びだ
し、咳き込んでいる男に差し出すと、大きな金盥かなだらから、餅のようにくつついた飯とうすい味噌汁を
どんぶりにすくってくれる。群がるようにして、着ぶくれた男たちが木のテーブルを取り囲み、立
ったままで食べている。どんな仕事を与えられるのか、そんな不安もあって、飯は喉を通らない。
まわりの連中をみても、それぞれ味噌汁をかけたり、大きなヤカンからだだこげくさいだけのお茶
をかけたりして、喉の奥に流し込んでいた。

「山本はどうした」

タオルを首に巻いて二階から降りて来た十八、九歳の青年にチョーバがたずねる。

「まだ寝ちよるよ」

「起こしてやれ」

「きょうは休むらしい」

「あいつ、またかあ」

1章 絶望の部屋——労働下宿の記録

「チヨバが階段に向かうと、どこからともなく黒いソフトをあみだにかぶった若い男があらわれ、
「ええたい、おれがいつてやる」

と、言うなり、身軽にかけのぼって行った。手配師である。

チヨバが名前を読みあげる。桃色の仙華紙にくるんだ弁当と百円札三枚が手渡される。「日鉄運輸」と横書きされたバスに乗せられる。ロマンスシートの観光バスだが、気持ちは重い。最後にヤクザふうの男が二、三人乗り込む。前借りした三〇〇円で、すぐ近くのタバコ屋でタバコを買ったり、もうひとつ弁当を買いに行ったりするものがある。ここの生活に慣れた連中で、下宿のまずい朝食を食わずに、バスの中で弁当をあけるのである。朝食を食わないとしても、一日四五〇円の「下宿代」が安くなるわけではないのだが。

チヨバがまた点呼をとる。日鉄運輸がこの日要求したのは四五人だったが、バスには九人も多い五四人が乗せられていたのだった。だれかが降りなければならぬ。みんなの不安そうな表情を見ながら、チヨバが鷹揚に言う。

「ええから、ええから、心配せんでええたい。ばあさん（社長）が五四人やるからって、いま電話したけんが」

だれかが尋ねる。

「そんで向うはなんと言いよるね」

チヨバは得意そうに答える。

「行くからいうて、電話を切ったよ。大丈夫や」

車内はちよつとどよめいた。社長の元請にたいする実力への称賛と、だれもが降りなくてすんだ安堵の気持ちが入りまじった嘆息だった。向うが忙しいときには無理してでも員数の都合をつけている。だから、こっちにアブレが多いときは面倒をみるべきだ。それが下請と労働下宿の持ちつ持たれつの関係である。

バスはようやく明けそめた洞海湾沿いの国道を走っていた。やがて濃いスモッグの中から、若戸大橋の鉄骨が姿をあらわした。わたしはようやく、八幡製鉄所戸畑製造所に向かっていることを知った。西門から入ったバスは、構内のはずれにある「労務者センター」の前で止まった。二階で作業衣に着換える。たち並んだスチール製のロッカーから、赤い鉄粉にまぶされた作業衣を捜しだして身につけ、傷だらけのヘルメットを拾い、やはり赤い粉塵でカチカチになった安全靴を履いて身ごしらえをする。

それが終わると、またバスに乗せられ、広大な構内を走る。太い赤錆びたパイプが地をはうように走り、ところどころで蒸気を吹き上げていた。いくつもの長い工場建屋の側を通り抜け、バスは赤い煙に包まれた高炉へ向かっていた。

黒いソフト帽をかぶった男が、もう一度名前を読み上げ、わたしたちは三班に編成された。ひとつの班は屋内の軽労働、もう一班は鉾石の船内荷役作業、そしてわたしは「ベルト下掃除」の班である。バスは一班ずつ降ろして止まった。

1章 絶望の部屋——労働下宿の記録

遠くに海が見えた。岸壁から高炉の下まで幾本もの長いベルトコンベアが流れている。あたりに、赤や青や黒の原料が無気味な山を築き、一陣の風が吹くと赤い砂漠に変わった。ベルトはそこを走る運河だった。現場詰所で渡されたスコップを担ぎ、日鉄運輸の現場監督に率いられて作業現場へ向かうあいだ、わたしたちは襲いかかる埃に顔をそむけ、しょっちゅう顔をしかめては、べっべつと唾を吐きだしていた。靴は粉塵に重く沈み、仕事もしないうちに作業衣から顔まで赤黒く汚れた。チームは八人だったが、カーキ色の軍服を作業衣がわりに着ている小柄な老人は、右足がひどいビッコのため、遠く遅れてついて来た。

巨大な三基の高炉が屹立し、その中腹をサイレンを鳴らしながら、無人電車が走っていた。それを仰ぎ見ながら胸の高さほどのベルトコンベアの下に膝をついてしゃがみ、ぎっしり詰まっている重い鉄粉を掻きだすのが、わたしたちに与えられた仕事だった。それは普通、小型ブルドーザーがやる仕事なのだが、ブルがすくいきれずに残したのは、人間の手で掻き出さなければならない。スコップを突き立てると、赤や青や黒の鮮やかな層が現われた。ベルトの回転を止めることなく高炉の操業を維持し、こぼれた原料を回収するために、どうしてもだれかが、新日鉄の本工ではない、下請の本工でもない、労働下宿の「人夫」がやらなければならない仕事だった。

わたしたちはベルトを挟んで並び、両側から溜まった原料の粉塵を突き崩した。そのたびに陽を受けてキラキラした鉄粉が空中に舞った。汚れた手袋で顔をこすするためもあって、眼と鼻のまわりには赤黒い隈ができて、顔を見合わすとたがいに吹き出した。